

日露交渉前^{かわじとしあきら}川路聖謨における対外政策の再検討

和田真樹(広島大学)

1. はじめに

本報告は、ペリー来航と同年である嘉永^{かえい}6年(1853)とその翌年に、露使^{ろし}応接掛^{おうせつがかり}としてロシア使節団プチャーチンとの交渉に従事し、そのなかで「開明派」や「限定交易論」者と評価されてきた¹川路聖謨に焦点を当てて、彼の対外政策の位置付けを再検討するものである。

川路聖謨は、明治維新の「敗者」とされた徳川政権の吏僚であるが、闇に葬られかけた出石藩のお家騒動を明るみに出したことで、徳川政権の吏僚としては例外的に「能吏」として評価された。戦後には、その評価が対外的な文脈においても敷衍されるようになり、ロシアに対する「限定交易」論を唱え、「開明」的な外交手腕を発揮した日露交渉の立役者として〔和田 1991〕など)、また西洋事情を説いた世界地理書の『海国図志^{かいこくずし}』の出版に尽力した「開明官僚」として〔源 1995〕川路が位置づけられた。

しかしながら、近年、このような川路の「能吏^{のうり}」イメージに対して疑問を投げかけた研究が現れた。川路とともに露使^{ろし}応接掛^{おうせつがかり}に任命され、日露交渉においてロシア国書の漢文翻訳に従事した古賀^{こが}謹一郎^{きんいちろう}サイドの研究では、川路の「ぶらかし」、すなわち回答延期策による外交を古賀自身が日記上で批判していたことを根拠に、川路の「開明派」能吏という評価を否定した〔小野寺 2006〕〔眞壁 2007〕。

これら先行研究が明らかにしてきたことは、①川路の「能吏」イメージが日露交渉の立役者として対外的にも敷衍されて位置付けられてきたこと、また②川路とともに、露使^{ろし}応接掛^{おうせつがかり}に任命された古賀謹一郎研究の進展から、川路聖謨の「開明派」能吏という評価が相対化されたことである。ここで生じる先行研究の問題点は、②の評価が、①の評価を裏返したものにすぎず、「能吏」か、反「能吏」、「開明」か、反「開明」という、相反する評価が併存する状態に留まっている点である。川路が日露交渉で幕末外交の最前線に立ち、「交渉の土台となる自他認識を自ら形作る思想家」〔奈良 2018〕であった以上、川路聖謨の自他認識とそこから形成される対外政策の問題を検討する必要がある。

そこで、本報告では、川路聖謨自身が遺した史料を使いつつ、他者が川路について書き留めた史料も合わせて用いながら、川路聖謨の対外政策についての再検討を試みる。それは、川路が遺した史料、とりわけ『川路聖謨遺書』を中心に川路分析を行ってきた政治思想史研究〔佐藤 1965〕〔竹村 2008〕とは一線を画しているといえる。

2. 他者からみた川路の政治姿勢

上記の政治思想史研究の課題を乗り越え、川路の対外政策の総体的な位置付けを行うためには、川路「自身」だけの視点にとどまらず、川路以外の「他者」の眼差しも踏まえながら考察するこ

¹ 主に〔和田 1991〕〔三谷 2003〕など、多くの開国史研究でその評価が定着している。

とが有効であると考え²。そこで本章では、川路の基本姿勢に対する他者からの眼差しを、積極開国論者として知られている戸田氏栄や古賀謹一郎の視点から明らかにしたい。

まず、川路聖謨が子孫のために、自らの職務を全うする心構えや忠義の重要性などを記した『川路聖謨遺書』を中心に、川路の基本姿勢を確認しよう。そもそも、川路は、徳川政権の要職である勘定吟味役に就任していたにもかかわらず、仕事の合間を縫って学問と武芸に励んでいた³。彼は、陽明学や宋学に関する書物を読んでいたのであるが、実際には学問を窮めようとする目的で読んでいたのではなく、本質的には、書物などを指す「文」よりも「武」の側面を重視していた。あくまでも「文」は、「武事をよくするための具」⁴、すなわち武芸を向上させるためのツールとして捉えられていたのである。「武国」である日本を統治する役割を担っている者にとっては、武を向上させない選択肢はなく、日本が滅亡するという危機的状況に直面すれば、富国強兵の実現が必要とされた⁵。そのような状況下で川路は、西洋の軍学に関することなどが記されている『海国図志』の書物出版にも尽力した。富国強兵の実現のために、川路は、「武事」を務めるうえで有用な「学問」をするという基本姿勢を重視していたのである。

では、川路の基本姿勢が他者からどのように見られていたのであろうか。川路とともに露使応接掛に任命され、ロシア国書の漢文翻訳を担当した古賀謹一郎は、「開明官僚」である川路の『海国図志』読解に対して批判を加えていた。川路は、西洋事情が記された清（中国）の世界地理書である『海国図志』から、オランダ製軍艦の値が「二万金」以内であることを読み取り、それがペリー来航の10年ほど前に長崎奉行の田口喜行がオランダ商館長に軍艦を注文した額とほぼ同額であると古賀に説明した。一方、古賀は、日本と清のあいだで金の価値が違い、両者は比べられないとしたうえで、佐賀藩の鍋島直正が注文した軍艦の費用は5000金未満であることから、「二万金」という値段では、外国（特にオランダのことか）から不当に利益を搾取されて自国の予算が尽きてしまうのではないかと指摘した。ここから、国家間の為替レートを知らず、字面だけを見た表面的な川路の『海国図志』読解を古賀が批判していることが確認できる⁶。さらに、川路が奈良奉行在任時に得た奈良の大仏に関するトリビアを古賀に話した際にも、古賀は、川路の話していることの7～8割が間違っていて、「権詐過人」、すなわちごまかしが甚だしいとの川路評も日記に記している⁷。このように、川路は元来、西洋軍学を積極的に受容し、『海国図志』の出版にも尽力する「開明官僚」として位置づけられてきたが、古賀謹一郎から見れば、川路の「開明」的カリスマが名ばかりで、表面的なものに過ぎなかったのである。

また、学問吟味試験をくぐり抜けた外交エリートで、浦賀奉行という役職に就いていた戸田氏栄は、異国船来航に係る海防対策として川路が提案した江戸湾内の「埋海」を批判し、川路を海防にあまり精通していない人物として位置づけていた⁸。異国船来航の対策として大船製造と砲術

² 奈良勝司氏は、世界観や認識の枠組みを、「異なる論理に生きる他者を媒介することではじめて可視化されるもの」と定義しており（〔奈良 2010〕、3頁）、本報告も、この定義を踏まえて、川路の世界観から形成される対外政策の問題を考える。

³ 「遊学雑誌」（山崎正董編『横井小楠遺稿』〈日新書院、1943年〉、804頁）、天保10年（1839）8月19日。

⁴ 「寧府紀事」（『川路聖謨文書 二』、417頁）、弘化3年（1846）11月27日。

⁵ 「川路聖謨遺書」（『川路聖謨文書 八』、146頁）、安政5年（1858）～慶応4年（1868）。

⁶ 「西使統記」（『幕末外国関係文書附録之一』、348頁）、嘉永7年（1854）11月25日。

⁷ 前掲註8史料、358頁、嘉永7年12月4日。

⁸ 井戸弘道宛戸田氏栄書翰（『南浦書信』、70・76・80頁）、嘉永6年（1853）7月2日・9日・12日。

整備が必須であるにもかかわらず、「埋海」という非現実的な対策に頼って外国と応接を行おうとしていたのである。むろん、ペリー来航の以前から「武」の重要性を頻りに強調し、西洋軍備の導入を主張した⁹川路であるが、砲術を学ばず、「砲弾にビク／＼^(ビク)」した川路の様子が戸田の目に映し出されていた。川路の中で、戦争に負けられない価値を表す「武威^{ぶい}」の力が働いたために、砲弾を恐れ、「埋海^{まいかい}」という避戦政策を取っていたと考えられるが、それを目にした戸田が川路の非現実的な海防政策を批判したのである。これらより、古賀や戸田をはじめとする積極開国論者には、川路の「開明」的カリスマが通用しなかったことがいえるだろう。

3. 筒井政憲^{つついまさのり}との比較からみた川路の対外政策の特質

ここまで検討したように、川路の「開明派」という評価が名ばかりで、表面的であるとすれば、「開明派」の根拠としてしばしば用いられてきた限定交易論の主張を再検討する必要がある。通説としては、日露交渉に露使応接掛として携わった^{かわじとしあきら}川路聖謨と筒井政憲がともにロシアに対する限定的な交易論を主張したとされてきたが、近年の研究成果によれば、川路と筒井は、性格の全く異なる人物であったことが明らかにされている。単純に言うならば、川路は、^{かんじょうけい}勘定系の筆算吟味に合格した財政面のエキスパートであったのに対し、筒井は、合理主義的な考えを持ち、学問吟味試験に合格した朱子学のエキスパートであった〔眞壁 2007〕。こうした両者の相反する性格を考え合わせると、川路と筒井の対外政策を一緒くたに捉えることはできない。そこで本章では、限定交易論者の川路と筒井という通説的イメージを突き崩したうえで、川路聖謨の対外政策の特質を、筒井政憲のそれと比較する形で明らかにする。

まずは、アメリカ使節のペリー来航期における川路と筒井の対外政策について確認する。両人が、元水戸藩主^{み とほんしゅ}の徳川齊昭^{とくがわなりあき}を訪問した際、異国船来航の対策として、アメリカに対する交易を提起したが齊昭に反対され、その次なる案として、西洋に対して 5 年から 10 年のスパンで回答を引き延ばす「ぶらかし」策を提起し、齊昭の同意が得られた¹⁰。この「ぶらかし」策が川路と筒井両人の対外政策とされてきたが、筒井は、「ぶらかし」策に同意した訳ではなかった。むしろ隣国であるアメリカとロシアに限定して交易を行うべきであると主張し、回答延引策（＝「ぶらかし」策）を批判する姿勢を見せていたのである¹¹。將軍^{とくがわいせよし}徳川家慶の死去という国事多難な時期を踏まえて、1 年程度は延期できるかもしれないが、「際限無く」、すなわちいつまでも断ったままの状態にはできないとする。この点から、筒井は、西洋に対して 5 年から 10 年のスパンで回答を延期する「ぶらかし」策には賛成しておらず、アメリカやロシアに対して限定的に交易を行うことが主眼にあり、実質的に「ぶらかし」策を主張していたのは川路だったのである。

このように、ペリー来航期の川路は、「ぶらかし」策を対外政策として主張していたことを筒井政憲の対外政策との対比から窺うことができたが、ペリー来航の 1 ヶ月後にロシア使節のプチャーチンが長崎に来航したことで、ロシアに対して限定的に交易を行うという対露限定交易論が徳川政権の有司のなかで盛んに主張された〔三谷 2003〕。実際に、川路を含む^{かいぼうがかり}海防掛^{かんじょうぶぎょう}の勘定奉行

⁹ 「寧府紀事」（前掲註 4 史料、389 頁）、弘化 3 年 11 月 8 日。

¹⁰ 徳川齊昭手記（『水戸藩史料 上編乾』、19～21 頁）、嘉永 6 年 6 月 14 日。

¹¹ 阿部正弘宛筒井政憲意見書（「大日本維新史料稿本」KA045-0306～0317〈東京大学史料編纂所 HP の「維新史料綱要データベース」を利用〉）、嘉永 6 年 8 月。

が連署した上申書¹²や露使応接掛^{ろ し おうせつがかり}任命後に筒井と共に連署した対議書¹³にその主張を見て取ることができる。ただし、これらの主張は、単に対露限定交易を目的としたのではなく、回答延期の手段として構想されたものであった。具体的には、ロシア以外の西洋各国が日本に通商を求めてきた際、ロシア側が「掛合」、すなわち仲介役として西洋各国に「示談」を挟むことによって、日本側としては西洋諸国の対応を2～3年間延ばし、「示談」が行き届けば、交易をしようというものである。ここから、川路の対外政策は、限定交易論を全面に押し出して主張していたというよりかはむしろ、外国に対して回答延期をするための一手段として主張しており、回答延期を批判する筒井とは性格を異にした対外政策であることが見て取れる。

4. おわりに

以上、日露交渉前における川路聖謨の対外政策を、川路以外の他者の視点も交えながら再検討を行った。川路は、一貫して「武」を重視し、富国強兵のために有用な西洋軍学などの学問に励むという姿勢を基本理念として主張していたが、積極開国論者の戸田氏栄^{と だ うじひで}や古賀謹一郎^{こ が きんいちろう}からは、川路は砲術を学んでおらず、西洋軍学のことなどについて記された『海国図志』^{かいこくずし}の読解に関して、字面だけに注目した表面的なものに過ぎないと批判していた。また、川路は筒井とともに限定交易論を主張したとされてきたが、むしろ実際は、2～3年や5～10年のスパンで回答を引き延ばす「ぶらかし」策にあり、あくまで限定交易論を回答延期の一手段として主張していたという点で、限定交易論に主張軸を置いて回答延期の「ぶらかし」策を批判する筒井の主張とは相異なっていたことを明らかにした。これらより、川路を西洋事情に精通した「開明派」でかつ「限定交易論」者としての評価を単純に付与することはできず、積極開国論者よりは相対的に対外事情の把握が表面的であったこと、また西洋に対する回答延期をして西洋諸国となるべく関係を持たないようにする川路の姿が浮き彫りになったのである。

主要参考文献

小野寺龍太『古賀謹一郎』（ミネルヴァ書房、2006年）

佐藤誠三郎「西欧への衝撃への対応——川路聖謨を中心として」

（篠原一・三谷太一郎編『近代日本の政治指導』（東京大学出版会、1965年））

竹村英二『幕末期武士／士族の思想と行為』（御茶の水書房、2008年）

奈良勝司『明治維新と世界認識体系』（有志舎、2010年）

奈良勝司『明治維新をとらえ直す』（有志舎、2018年）

眞壁仁『徳川後期の学問と政治』（名古屋大学出版会、2007年）

三谷博『ペリー来航』（吉川弘文館、2003年）

源了圓「幕末日本における中国を通しての「西洋学習」——『海国図志』の受容を中心として」

（源了圓・厳紹璽編『日中文化交流史叢書3 思想』（大修館書店、1995年））

和田春樹『開国——日露国境交渉』（NHKブックス、1991年）

¹² 阿部正弘宛海防掛勘定奉行（石河政平、松平近直、川路聖謨）・勘定吟味役（竹内保徳、松井助左衛門等）上申書（『幕末外国関係文書之二』、16頁）、嘉永6年8月。

¹³ 阿部正弘宛川路聖謨・筒井政憲対議書（『水戸藩史料 上編乾』、171頁）、嘉永6年10月。